



2017 1

JAPAN
APIC

No.004

Since 1975



3

特別インタビュー

学校法人 上智学院

高祖 敏明 理事長

7

カリブ地域における国際協力事業

コーヒーでつながる日本とジャマイカ

UCC 上島珈琲株式会社 代表取締役会長
在神戸ジャマイカ名誉領事

上島 達司 氏



9

12

ジャマイカ環境セミナー

13

太平洋地域における国際協力事業

大使の声

駐日マーシャル諸島共和国特命全権大使

トム・ディー・キチナー 閣下

ミクロネシア離島へ貯水タンク支援プロジェクト
麗澤大学シンポジウム
ミクロネシア異文化体験ツアー
ミクロネシア短大学生の短期留学（麗澤大学・上智短大にて）
太平洋・カリブ記者招聘



15

17
18
19
21
23



25

グローバル化に向けて

インタビュー

エーオンジャパン株式会社 山本達也 社長



27

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 千賀邦夫 事務局長

29

ザビエル留学生奨学金

31

APIC カントリー情報早朝講演会

33

ミクロネシア写真展『南洋の光』

※記事本文に掲載されている役職・機関名等は、事業もしくはインタビュー実施時点における名称を使用しています。



一般財団法人国際協力推進協会

理事長

佐藤嘉恭

いあふあし

自宅の四畳半の書齋に「共に咲く喜び」と銘打った武者小路実篤の一幅の絵がかかっている。国際協力の事業に相応しい言葉であると思っっている。太平洋地域やカリブ地域の人々との交流を深めるにつれ、この言葉の深淵さを感じている。

最近、ミクロネシア連邦のミクロネシア短期大学（COMIFS）から四名の学生を上智大学・上智短期大学と麗澤大学の短期研修授業に迎えて頂いた。ミクロネシア短大の学生四名を受け入れることにより、学生交流が双方交流となったが、まさに「叡智が世界をつな



ぐ」という上智大学のミッションの一端を実現してゆく道のが築かれた。COMの四人が異口同音に、日本の学生と接して友情を深めたこと、日本の現実を見聞して多くを学んだこと、日本の家庭に温かく迎えられて家庭教育の現場を実感したこと、などに深い感慨をおぼえたと謝意をこめて熱く語る感想に感動した。

上智大学、麗澤大学など多くの関係者の協力により交流の成果が実り、花が咲いた。その喜びを一同と共有したい。

2017年1月 記



今号の表紙写真

ミクロネシア連邦
チューク環礁

Photo Courtesy
Floyd K. Takeuchi /
Waka Photos



2016年7月～12月のAPICの主な動き

- 7月28日 第327回早朝講演会（前在連合王国特命全権大使 林景一氏）
- 8月1日 上智大学より3名のインターン生を受け入れ（～9月16日）
- 8月9日 上智大学インターン生が学校法人上智学院高祖理事長を訪問
- 8月24日 上智大学インターン生がエーオンジャパン株式会社を訪問
- 8月25日 上智大学インターン生がセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンを訪問
- 9月11日 上智大学・上智短期大学ミクロネシア異文化体験ツアーを実施（～18日）
- 9月15日 第328回早朝講演会（前在フランス共和国大使 鈴木庸一氏）
- 9月21日 ザビエル留学生第3期生のミコくんが上智大学に入学
- 10月18日 APIC-FPCJ 太平洋・カリブ記者招待計画を実施（～26日）
- 10月20日 第329回早朝講演会（前国連代表部特命全権大使 吉川元偉氏）
- 10月31日 ミクロネシア短期大学から学生4人の受け入れ計画を実施（～11月17日）
- 10月31日 ジャマイカの西インド諸島大学モナ校にてカリブ環境セミナーを実施
- 11月17日 第330回早朝講演会（外務省北米局参事官 小野啓一氏）

上智学院 高祖理事長インタビュー

学校法人上智学院

高祖 敏明 理事長



上智大学とAPICは、一昨年の12月に教育連携にかかる包括的な協定を提携するなど、協力体制を強めています。今回は上智学院高祖理事長に、これから上智大学が目指すもの、さらに、APICとの関係についてインタビューしました。【聞き手…インターン生 兼子美帆。2016年8月9日】

Q・高祖理事長は上智大学出身ということですが、どのような学生でしたか？

私は外国語学部のドイツ語学科に入学しました。高校まで英語を学んでいましたが、これからの時代は英語だけでなくもうひとつ言葉ができればいいんじゃないか、という周りの声にのせられましてね。初めて学ぶ言葉ですので、やっぱり難しかったです。また、ある人から大学で山岳部に入ったらどうか、と誘われました、私は一年しかいなかったんですけども、長期休暇中の合宿を含めて一年の五分の一近くは山に行っていました。でも、大学では勉強すべきだと考えていましたので、毎日朝の一時間目にあつたドイツ語の授業に必死に生きていましたね。

Q・上智大学の掲げる「他者のために、他者とともに」※の教育精神のもと、学生たちにどのようなことを学んで社会に生かしてほしいとお考えですか？

「他者のために、他者とともに」という短く、かつ含蓄のある言葉にそれがよくまとめられていると思います。

一つは、上智大学のキャンパスを地球の縮図にしたい。しかし同時に、学生や教員や職員にとつてのキャンパスは、四谷だけではなく世界全体が対象で、そうしたイメージの中で学び、広い世界に自分たちが生きていくという心構えや視野、知識、技能などを身に付けてほしいと思います。地球はいわば私達人類の家なんです。地球は自分たちの家で、一緒に住んでいる私達は家族なんだ、という感覚を身に付けてほしい。自分たちの家をみんなで大事にして、これから将来を担う人たちにもこれをいい形で渡していく責任があることを考えてほしいですね。

二つ目は、歴史を通し、人は人として平等だということを確認してきましたが、しかし目を開くと、人間は、人間として平等だけでも、生まれてくるのは不平等です。生まれてくる家庭も、社会層も、国も、自分が選べないものを背負いながら生まれてくるのです。この「他者のために、他者とともに」には、そういう不平等を背負って生まれてくる人たちがどうやって他人と仲間となり、一緒に生きていったらいいか、そのヒントが込められていると思います。

【略歴】

1947年広島県江田島生まれ。イエズス会司祭。学校法人上智学院理事長、上智大学総合人間科学部教育学科教授。上智大学、同大学院教育学専攻で学んだ後、母校の教員となり、文学部長などを経て、1999年より上智学院理事長に就任。専門は比較教育史。著書に『東洋の使徒 ザビエル』（上智大学出版）、『ルネサンスの教育思想』上、下巻（東洋館出版）等多数。現在、文部科学省「政策評価に関する有識者会議」委員、日本学術会議「大学教育の分野別質保証委員会」委員、経済同友会幹事をはじめ、多くの団体の理事・評議員等を務める。

不平等、例えば障がいを持って生まれた人たちの場合でも、不便だけど不幸ではないと、よく言われます。それぞれが足りないところ、強いところを持っているから、一緒に協力できる、人のために働いてみようと思うことができる。それがこの言葉の中に込められていることでしょうし、それができるような学生を育てるのが上智の一つの大きな目標だと思っています。

こういう考えは、人生をかけて深め、広げていくものですので、大学ではそれにつながる知的な体験や、感動といった感情的な体験をしてほしい。そして社会に出た後、そうした体験を重ねて、壁にぶつかったり、考えたりしながら、そこに込められている意味を自分なりに探り出していく、そういうことができる生き方をする学生になってほしい。だから、この考えを完全に身に付けてから卒業するというよりも、こういう方向に向けて生きるぞっていう人を育てていくことが大切だと思います。

Q・2014年に上智大学がスーパーグローバル大学に選ばれましたが、このことについてどのような意義があると思われますか？

上智は創立当初から、グローバルな視野を持って誕生している大学ですので、スーパーグローバル大学といったことを改めてうたわなくてもいいんじゃないかという声もないわけじゃないんです。しかし、今の時代、グローバル化をさらに率先して進める、そしてそれが世界を繋いでいくっていう意味づけの中で、上智がスーパーグローバル大学に採択されたのは、上智にとつてはありがたいことだと思います。しかし、上智には上智の理念や目標があります。

で、日本の文科省が想定しているレベルに留まらず、もつと世界とのネットワークを活用し、もつと広い視野で地球を見るとき、上智だからこそできることをするべきだと考えます。世界中の人と関わろうとすることによって、「叡智が世界をつなぐ」というミッションを実質化していく。そして、その実質化というのは、どの国もそれぞれが自分の足で歩んでいく、という方向につながっていく、それが大事なんだろうと思います。相手が自分の足で歩んでいけるような支援をしていくわけですけども、支援するだけでなくそこから同時に学ばなければならぬ。これって相互交流だと思っんですよ。それを上智は、スーパーグローバル大学構想の中で実現していくってことではないでしょうか。

Q・2015年から「インターンシップ科目」が始まりましたが、これに参加している学生に対し、どのような期待をお持ちですか？

まず、インターンシップは非常に大事だと思っています。これにはいくつか理由があります。今、日本で一般にインターンシップと言われているものは、一日インターンシップが多い。でもそういうのはインターンシップとは呼びたくない。インターンシップをやるんだしたら、やはり内容がきちんとしたものをやるようにしたいと思います。

それから大学の先生たちの多くの研究は通常、今動いているモノを研究するのは難しい。それらについている意見はあるかもしれないけど、研究するのは、大半の対象は3年前、5年前で止まっています。そうすると、教科書の説明は、数年前くらいまでの研究成果を中心に構成されています。

かしインターンシップなら、今動いているモノを、それを動かしている人たちの下で学べます。上智が目指している方向での仕事をしたいらっしゃる機関や団体、会社などの現場で学生たちがインターンをやらせてもらえれば、今の社会がどう動き、社会がどこにいかうとしているかを学ぶことができる。これが、先ほど申し上げた、キャンパスは世界全体だよということの一つの大事な意味でもあるんです。このインターンシップで学生たちは学び、社会を、世界をよりよく知ることができ、それを通して自分の強みや弱み、自分が何に関心があるのかといったことも発見できるでしょう。そうなれば、社会を、世界を、自分を知る、ということに大きく役立つと思います。

Q・上智大学とAPICの協力体制についてどのようにお考えですか？

上智は2013年に創立100周年を迎え、上智の歴史、現在のポジション、今後のミッションを、「叡智が世界をつなぐ」という言葉にまとめました。私たちも世界について思いめぐらせ、いろいろとイメージを持っていましたが、APICからザビエル高校の留学生受入の話があるまで、この太平洋地域やカリブ海の国々のことは、上智のほとんどの人の頭から抜けていたし、太平洋の中にいるんな国があり、そこに私たちと歴史的にも深い関わりがあるということについては、ほとんど意識していなかったように思います。

しかし上智のこの言葉の中には、当然これらの国々も入ってしかるべきだし、私たちがこれまで十分には意識しておらず、多くの人が目を向けていない、一緒に教育や研究の活動をしていく。これが実現できるとい意味では非常に楽しみにしています。

Q・本年1月に、APICにより、太平洋・カリブ地域学生招聘で16名が招待され、上智の学生と交流しましたが、この交流計画についてはどのように思われますか？

上智はずっと以前からサマー・セッションという三週間の、日本の文化、政治、経済などを英語で紹介するコースを実施していて、それを冬にも行いましょうということが始めたものです。今年の一月のコースには、APICが主導してくださって、太平洋地域から8名、カリブ海の西インド諸島大学から8名が来日しました。最終日には4人一組で4つのチームになって、それぞれ日本で体験し学んだことを10分程度で紹介してくれました。私も参加したのですが、和気あいあいとして、それぞれ出身が異なる人たちが仲良くなって、パワーポイントと一緒に作って発表したり、いい学びをしたんだなあと思えました。そして、これからの時代はやっぱり若者が担っていく。そうした中で若者が自分の国しか知らないというのではなく、他の国のほぼ同世代の人たちに、顔と名前を知っている人がいるっていうのは、旅行だけでなく仕事など、何をするにしても強いと思いますよ。そういう関係を今の大学時代に、芽のようなものを作っておくのはとても大事だと思います。これは日本人の学生だけではなく、日本に来る留学生たちにも言えますね。一番最初に申し上げた、地球に住んでいるみんなが自分の仲間なんだってことを、交流を通して体験し、肌の色が、話す言

いであろう国、しかし地球と一緒に構成している仲間と、世界をつなぐと言っている私たちが手をつないでいくという点で、とても良い機会を与えて頂いたと感じます。そして驚いたことに、ミクロネシアに行っても、ジャマイカに行っても、トリニダード・トバゴに行っても、上智の卒業生がいるんです。彼らが現地の大学や大使館にいて、それぞれ勉強していたり、自分の人生プランに基づいてキャリアを積み上げたり、まさに「他者のために、他者とともに」ということを、自分の置かれた場で活かそうとしているんです。こういう出会いは、とてもうれしい体験でした。



インタビューに臨む高祖理事長。聞き手はインターン生兼子

葉が、動作が、やるのが違うといっても、結局話してみると同じ仲間、同じ人間だな、ということを知ってほしい。そうして、やっぱり自分たちは同じ一つの地球に住んでいる仲間だということを確認でき、それが安心感や信頼感につながるという意味でも大事だろうと思います。だから、そこで日本のことを学ぶこともありがたいことだし大事ですけど、それらを通して人間として信頼できる仲間ができる、あるいは発見しあうという、そちらのほうがもっと大事なという気がしています。



「太平洋カリブ地域学生招聘のプログラム最終日、上智大学のフェアウェルパーティーにて挨拶を行う高祖理事長」

Q・以前からAPICと上智大学は協力関係にありましたが、さらに一昨年の12月にAPICと上智大学に連携協定の締結がなされました。このことについてどのようにお考えですか？

連携協定によって、例えばミクロネシアにある短期大学と、上智大学と上智の短期大学部との学生たちの交流が可能になりました。それから、カリブ海地域も太平洋諸島も、気象変動で相当影響を受けていますよね。一方上智には、地球環境を専門にする大学院があり、その分野の研究者も結構多いんです。このような地球、人類が抱えている課題の中で、自分たちに共通する問題を一緒に研究する可能性もあるわけです。しかも日本のみでこれを研究するのはなく、他国と協力して行うというのは研究の意味でも非常に広がりがあるし、それぞれがお互いに学びあうこともできるでしょう。ですから、この連携協定というのは、教員にとっても学生たちにとってもチャンスが広がることになりました。

実際に上智大学と上智の短期大学部、麗澤大学と一緒にチームを組み、ミクロネシアに行き交流を行う、ホームステイさせてもらう、そして現地の歴史や文化を学んでくるなど様々な交流を行っているし、研究の面でも環境問題を軸に交流がもうすでに始まっています。そうやって留学生を受け入れるだけに留まらない、大学の三つの役割と言われている教育、研究、社会貢献それぞれについて、APICが持つていらっしゃる様々なリソースやネットワークを、上手に上智も使わせてもらいながら、頂いた機会を使って、太平洋諸島やカリブ海地域の国々との関係を深めていき、それにより先ほど申し上げた、「叡智が世界をつなぐ」の「世界」の中に、太平洋諸

◆インターンを終えて◆

**上智大学 外国語学部
2年生
兼子 美帆**



高祖理事長へのインタビューは、自分を成長させる一歩であり、自分に自信をつけさせてくれた仕事でした。インタビューの経験もなく、どのような質問をしようか、上手く記事にまとめられるだろうか、という不安が多くありましたが、インタビューを終え振り返ってみると、インタビューのための下準備や、聞き取った内容のまとめかたなど、社会にでて必要になってくる技術や考え方を自分なりに学び、実践していったと思います。APICでのインターンシップを通して、国際協力の現状について知ることができました。APICは太平洋島嶼国やカリブ海地域との協力を主に推進しており、それらの国と日本の繋がりがどのように現在の交流に活かされているのか、また、国際協力は様々な団体の協力があるからこそ成り立つ、ということを実践の場で見、学びました。

今回のAPICでのインターンにおいて、多くのことを経験させていただき、さらに社会人としてのマナーなど、大学にいただけでは学べないことも学べました。このような貴重な機会を与えていただいたAPICの皆様、上智大学関係者の皆様に心から感謝いたします。この経験を将来に活かすため、さらに勉学に励んでいきたいと思

参加学生の出身国・地域	参加学生数	参加大学
ミクロネシア連邦	2名	College of Micronesia - FSM
パラオ共和国	2名	Palau Community College
マーシャル諸島共和国	1名	College of Marshall Islands
フィジー共和国	1名	University of South Pacific
サモア独立国	1名	National University of Samoa
ソロモン諸島	1名	The Solomon Islands National University
バルバドス	2名	University of West Indies Cavehill Campus
ジャマイカ	2名	University of West Indies Mona Campus
トリニダード・トバゴ共和国	2名	University of West Indies St. Augustine Campus
モントセラト	1名	University of West Indies Open Campus
セントビンセント及びグレナディーン諸島	1名	

【2016年「太平洋・カリブ学生招待」に参加した学生の出身地域・大学】

カリブ地域における国際協力事業

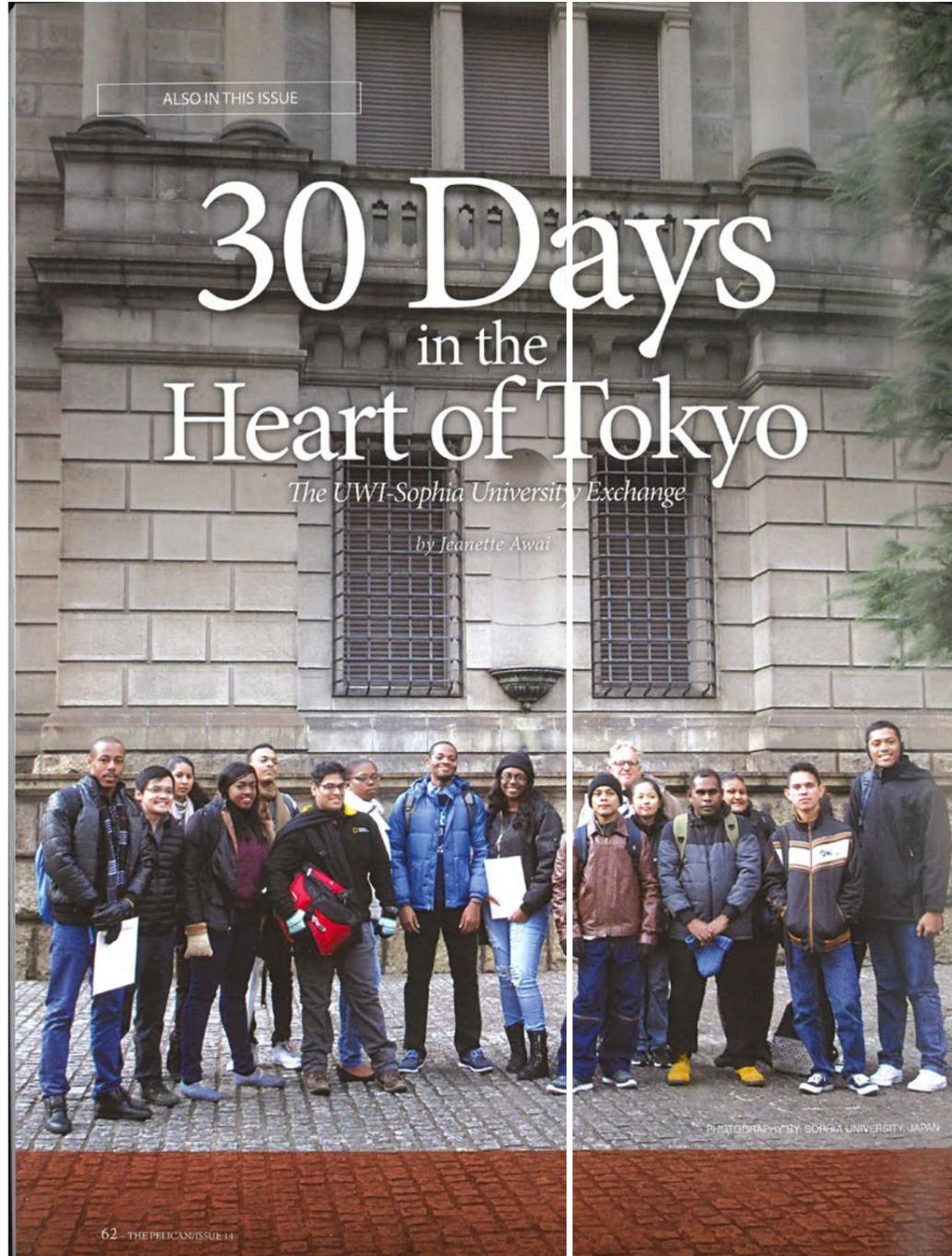
西インド諸島大学の機関紙に掲載された2016年「太平洋・カリブ学生招待」

2016年1月4日から30日にかけて、太平洋島嶼国とカリブ諸国からの学生計16名を日本に招待、学生は上智大学のスタディー・プログラムに参加しました。平日は上智大学において英語による授業を受け、さらに日銀の視察や観光地巡りなどを行いました。

上智大学に設置されている「日本研究」のプログラムでは、「日本の企業と経済」「日本におけるメディアと現代の問題」「日本語」の3つが学習領域として提供されました。各領域

における講義にはプレゼンテーションなど学生主体の活動が多く組み込まれており、受講者は独自にインタビューを行うなど、非常に体験的なプログラムとなっております。

参加学生は日本での研修を真に楽しみました。西インド諸島大学の参加者は、帰国後、日本での経験が如何にすばらしいものであったかについてインタビューに応じ、同大学の機関誌「東京の中心での30日間」という表題で記事が掲載されました。



“I did not believe the email at first, ‘Congratulations, you’ve been selected to go to Japan for an exchange programme... I thought it was spam or something, then I got the call and I was so excited!’” Final year student, Kimberly Browne of The UWI St. Augustine campus captured the sentiments of seven other UWI business and tech students from each of The UWI’s four campuses who were selected to participate in a one-month exchange programme at Sophia University. The initiative which is funded by the Japan-based Association for Promotion of International Cooperation (APIC), seeks to promote international cooperation and deepen mutual understanding between Japan and various countries, but in the words of Aaron Boodram, The UWI St. Augustine, final year student in Management Studies, “we’ll get to that later, there’s so much to tell.”

Embarking on the trip of a lifetime requires some legwork and all the students agreed that they were fully prepped for the experience thanks to APIC who helped

them with everything from attaining their VISAs to what to expect in Tokyo. The students took it upon themselves to create a WhatsApp chat group since they knew little of each other before the programme. The first time the entire group met was their first night in Japan. With little sleep, 14 hours of flying behind them and school the next day, they could feel themselves already changed, not only by Japan, but also by each other. Dane Miller, Computer Science major at The UWI Mona campus with a soft spoken demeanour, spoke about how his classes at Sophia University, specifically the Media and Contemporary Issues in Japan class that took him out of his comfort zone, “We had to interview Japanese people on the street and in my field, Computer Science, we never do anything like that and at first it was strange.”

Educational exchange is at the core of the UWI-Sophia initiative which is part of a wider cooperation programme between CARICOM and Japan. The initiative also includes a memorandum of understanding (MOU) signed in September 2015 by



上：カリブ地域の地図（着色部分はカリコム加盟国）
右：西インド諸島大学発行の冊子「The Pelican」に掲載された記事

コーヒーでつながる日本とジャマイカ

UCC 上島珈琲株式会社 代表取締役会長
在神戸ジャマイカ名誉領事

上島達司氏



な地域環境保全NPO団体「レインフォレスト・アライアンス」認証の取得に目をつけたのです。

レインフォレスト・アライアンスの認証を受けるには、「農園以外で一定の森林を保持しなければならない」、「農業の持続性を確保しなければならない」といった規定がたくさんあります。例えば、農園の中ではトラクターを使用する場合、燃料が漏れる危険があるため、燃料タンクをコンクリートで囲む必要があります。しかし、現地では環境保護の重要性が浸透していないため、そのような環境整備に誰も取り組みません。そういう意味からも、レインフォレスト・アライアンス認証の必要性を感じ、UCCがカリブ海地域で一番最初にこのような取り組みを始めたのです。日本の消費者と現地の生産者との橋渡し役として農園を開設し、環境保全や労働環境向上という方向性を打ち出しながら、ブルーマウンテンコーヒーの価値向上のために努力してきました。その結果、現地の生産者の方々の意識が高まり、コーヒーの品質向上に対して危機感を持って取り組みでもらえるようになりました。

Q・現地の地域に対する貢献事業として、どのような取り組みを行っていますか？

現地で環境セミナーを開催したり、現地の学校の年間行事を経済的に支援したり、鉛筆を配布したりしています。

環境セミナーは、環境保護や、より品質の高いコーヒーを生産すれば、より高値で売ることが出来るということなどを、現地の方々に知ってもらうように努力しています。環境セミナーの後には、懇親会も兼ねた食事会を行うなど、交流を深める機会を積極

的に設けるように心がけています。

また、CSR活動の一つとしても、現地で技術指導を行っています。ここでは食の安全を保つためにも、極力、農薬を使わないようにしながら、病虫害対策をするという指導も行っていきます。

学校への支援としては、勉強に必要な品々の提供や毎月一定額の寄付をするといった経済的支援だけでなく、UCCの農園のスペースを使って、運動会を開催してもらおうということも行っています。

このような活動に取り組みと、収穫の多忙期には、みなさん手伝いに来てくれます。こうした相互のやり取りがあることにより、農園の周辺の地域とは特に、コミュニケーションが深まっています。

また、コーヒーを通して障がい者の方々に支援しています。障がい者の方々が土産品を作る学校には、コーヒーを提供しています。

Q・コーヒー豆の品質管理や品質向上のための工夫はどのようなものがありますか？

品質管理については、CIB※というジャマイカの政府系の組織があり、品質管理と輸出手続きを担っています。このCIBでは厳しい品質基準を設けることで、品質管理を行っています。

品質向上に関しては、UCC独自で2015年から、現地の方々の協力の下、品質コンテストを開催しています。ブルーマウンテンコーヒーはジャマイカの中でも特定の地域で栽培されたものだけを指し、品質コンテストでは、その特定の地域内の農園の生産者が参加していただいています。具体的には、それらの地域を5つの地区に分け、地区ごとの生産者でグループを組んでもらい、その地域の特性を

ジャマイカはブルーマウンテンコーヒーの生産で有名です。現地でコーヒー農園を開設しているUCC上島珈琲株式会社 代表取締役会長（在神戸ジャマイカ名誉領事）上島達司氏にインタビューを行いました。【聞き手：インターン生 松尾彩花。2016年10月11日】

Q・レインフォレスト・アライアンス認証を受けていますが、その認証を受けるまでの過程はどのようなものでしたか？

ジャマイカのブルーマウンテンコーヒーは世界最高峰のコーヒーとして大変人気があります。この人気ブランドのコーヒーの日本への安定供給を目的に、1981年にジャマイカのブルーマウンテンエリアに農園を開設しました。日本はブルーマウンテンコーヒーの最大の輸入国です。しかし、近年は他の生産国でもスペシャルティコーヒーが生産されるようになり、競争が激しくなってきたため、ブルーマウンテンというブランドに更なる付加価値が必要になりました。そこで、当社の農園でも国際的

ご略歴

- 1961年 甲南大学経済学部卒業
- 1965年 上島珈琲株式会社 代表取締役副社長
- 1980年 上島珈琲株式会社 代表取締役社長
- 1982年 在神戸コロンビア共和国名誉領事館 名誉領事（至現在）
- 1988年 在神戸パラグアイ共和国名誉総領事館 名誉総領事（至現在）
- 1996年 在神戸ジャマイカ名誉領事館 名誉領事（至現在）
- 2009年 UCC 上島珈琲株式会社 代表取締役会長（至現在）
- 2010年 UCC ホールディングス株式会社 グループ代表 代表取締役会長（至現在）

活かしたコーヒーを出品していただいています。そして、酸味、甘味、外見などを基準に点数化し、順位付けを行います。入賞者には、肥料や農機具などの賞品も贈呈し、入賞したコーヒーはUCCが輸入して日本で販売しています。



【UCC 東京本部で行ったインタビューの様子】

この品質コンテストは、ジャマイカのみならず、ブラジル、ハワイ、エチオピア、ベトナムなど世界中のコーヒー生産地で行っており、各生産地のコーヒーの品質向上及び良質なコーヒーの日本市場への安定供給を目的としています。また、現地の方々にも、良質なコーヒーを生産することの重要性を理解していただくいい機会になっていると思います。

Q・ジャマイカへの思いについてお聞かせください。

やはり、何か恩返しをしなければいけないと感じています。ブルーマウンテンコーヒーを通じて商売をさせてもらっていますので、ジャマイカと日本の双方のお役に立ちたいと思っています。そういう意味からも、先日、ジャマイカのスポーツ選手が日本の鳥取県を練習のキャンプ地として選んでくれたことは、非常に嬉しかったです。こうやってジャマイカと鳥取県の関係ができて、親交を深めていただけていることは良いと思います。このような取り組みは、「草の根」のような活動ですが、両国の関係を深めるうえで大変重要なことだと思います。

ジャマイカへの恩返しという意味では、農園での雇用を生み出したり、新しい農事技術を紹介することができたと思います。さらには、そのコーヒーを日本で嗜好品として普及させて、日本のコーヒーファンの皆様にも喜んでいただくことが出来、両国のお役に立てたことは非常に嬉しいです。

今、世界的にコーヒー全体の消費量は増加しています。その需要に応じて、生産性も向上させる必要があります。しかし、日本人は品質に対する選別の目が厳しく、日本市場では質が伴わないと受け入れられません。だからこそ、こうした日本の消費者の

ニーズを現地の生産者に伝え、ジャマイカ産コーヒーの高い品質を保ちながら、生産性を向上させるよう共に努力しています。

Q・ジャマイカ名誉領事として、両国の交流・発展についてお聞かせください。

今後は、外務省が行っている施策を活用し、ジャマイカの農業をより発展させていくことを一つの目標としています。具体的には、生産性向上と消費量の増加を目指しています。数年前のハリケーンの影響で生産量が、最盛期の四分の一程度になりましたが、生産性が高まれば、更に、消費量も増え、現地の収益も上がり、生産者の活力も増すのではないかと考えています。

そもそもコーヒーの木は、7年をこえて10年近くになると収穫量が年々落ちていきます。一本あたりの収穫量を保つためには剪定をして、生産性を高く維持していくか、状況によっては新しい木に植え替えてあげる必要があります。しかし、ジャマイカでは、コーヒー農園が山岳地帯などにあり、生産性を維持するための対策が遅れているのが現状です。UCCではコーヒーの品種はもちろん、手入れにもこだわることで、生産性の向上に努めています。

また、教育という面では、単なる技術指導で終わってしまっているのもつたいないと思っています。技術を教えるだけではなく、「自分が知識を得て、それを活かして働けば、自分の国の発展につながる」ということを自覚してもらえようという教育も行っていきたいと考えています。

11/31
ジャマイカ
環境セミナー

APICは、2015年7月に上智大学と共催で、「太平洋地域における環境保全シンポジウム」を上智大学において開催し、環境セミナーシリーズとして、第2回目は、同年8月にパラオで開催したところですが、本年は、同シリーズとしてカリブ地域で初となるセミナーを、10月31日に、ジャマイカの西インド諸島大学(UWI)で開催しました。



【壇上で挨拶を行う島内大使】

APICからは、島内評議員（政府日・カリブ交流年担当大使）と荒木理事・事務局長が参加し、荒木理事・事務局長がセミナーの司会を行いました。

会場は、UWIの会議室で、同大学の環境学の教授陣のほか、トリニダード・トバゴの大使、環境省の幹部などを含めて、約50名の参加者がありました。講師

は、上智大学地球環境学研究所あん・まくどなるど教授で、昨年のパラオに引き続き講師を引き受けて頂きました。

冒頭、共催のUWIの副総長代理であるBernard大使（元駐米大使）の歓迎の挨拶では、APICの学生招待や今回のセミナー開催に対する謝意のほか、昨年の安倍総理のジャマイカ訪問の際に上智大学とUWIの間で締結された覚書(MoU)に基づき、両大学の交流が深まることに対する謝意と今後の交流に対する期待が表明されました。

島内大使からは、APICの事業の紹介、特に、カリコム諸国との間では環境が重点分野であること、今般は、特に、APICと上智大学の間でMoUに加えて、安倍総理の訪ジャマイカの際に締結されたUWIと上智大学のMoUに基づき、こうした交流が行われることは喜ばしいことであると挨拶、まくどなるど先生の紹介も行われました。

講演では、まくどなるど教授が、「島嶼国の未来図を描く※」という題で、プレゼンテーションを行い、日本では、環境と漁業のバランスを取るため、一律の政策の押しつけではなく、地域地域で、漁業関係者と環境の専門家が話し合っ解決しているという例をいくつも紹介されました。質疑応答においては、大学教授や環境省の代表からも熱心に質問があり、環境に対する関心の高さとレベルの高さを再認識したところで、また、翌日のUWIの海洋研究所訪問(Marine Laboratory)においても、ジャマイカの高校生全員が環境科目を必修としており、同ラボの教授が高校に出向いて授業をしたり、また、高校生がラボで体験学習をするなど、ジャマイカの環境に対する関



【左から：同行していた高瀬前駐ジャマイカ大使・上島会長・松尾（インターン生）・小原（インターン生）】

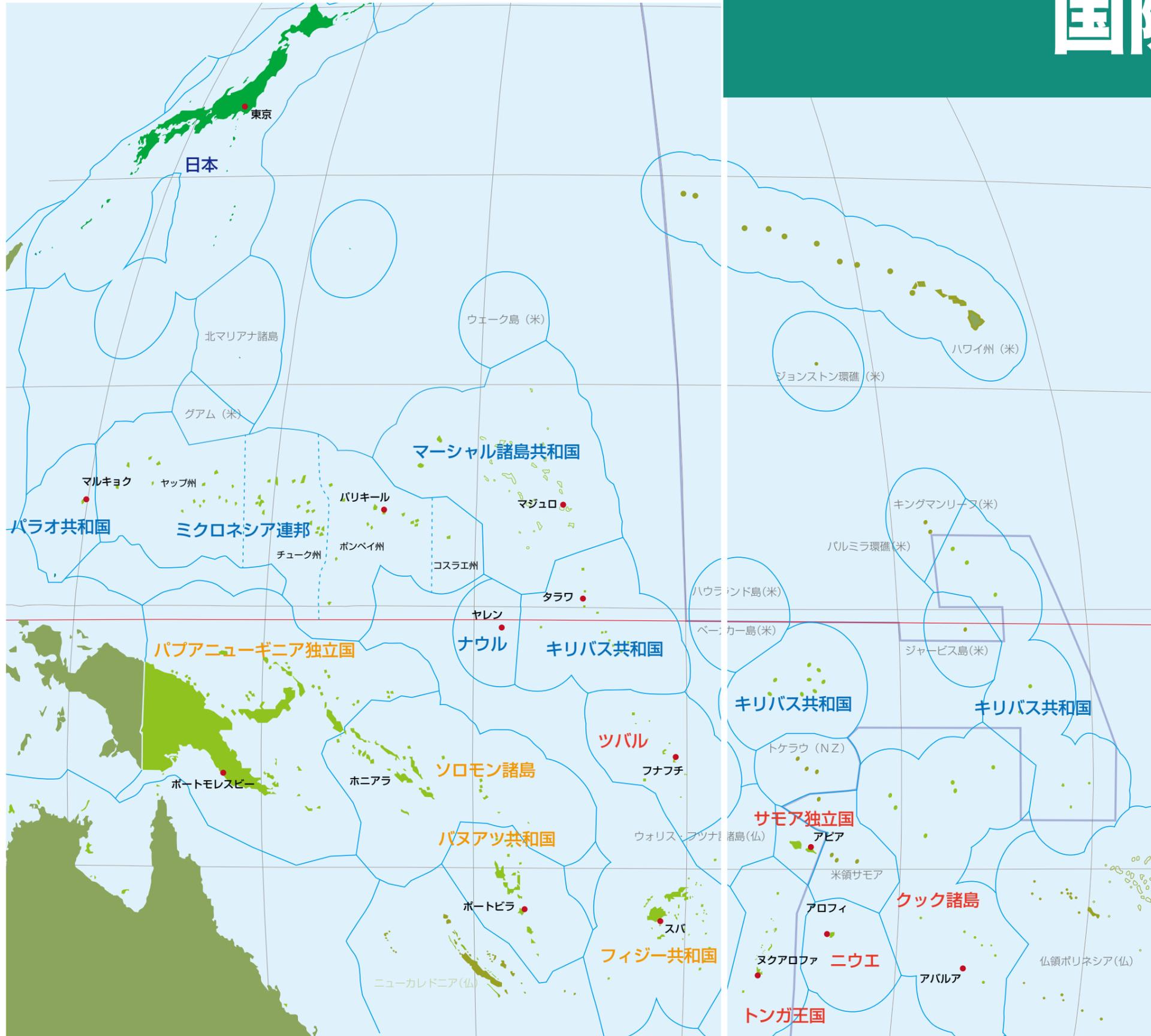
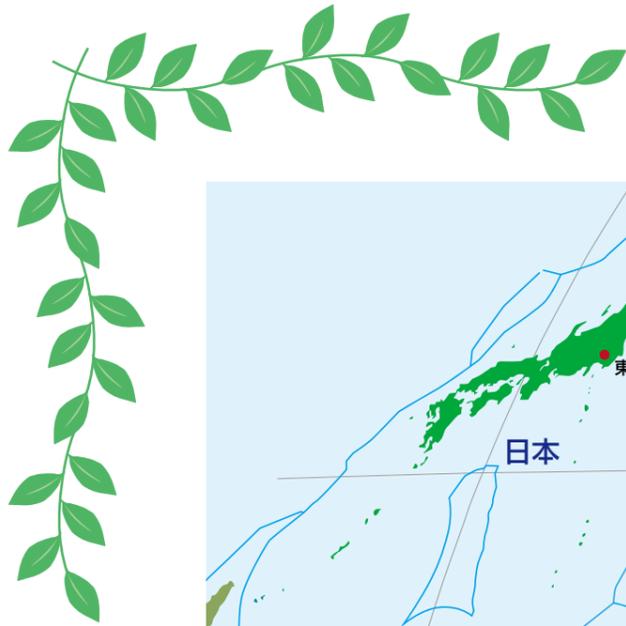
心とレベルの高さに、まくどなるど教授も含め、出張者は感銘をうけました。

なお、セミナー翌日、島内大使はジャマイカ外務大臣との会談に臨みましたが、同会談終了後に、まくどなるど教授と荒木理事・事務局長も参加し、外務大臣にセミナーの模様について報告したところ、かかるセミナー開催は日本とジャマイカの交流に寄与するものであると高く評価されました。



【古都ポート・ロイヤルのマングローブ林の視察】

太平洋地域における 国際協力事業



【ミクロネシア】

-  キリバス共和国
-  ナウル
-  パラオ共和国
-  マーシャル諸島共和国
-  ミクロネシア連邦

【メラネシア】

-  ソロモン諸島
-  バヌアツ共和国
-  パプアニューギニア独立国
-  フィジー共和国

【ポリネシア】

-  クック諸島
-  サモア独立国
-  ツバル
-  トンガ王国
-  ニウエ

マーシャルと日本の友好関係に向けて

9月16日、マーシャル諸島共和国キチナー大使にインタビューを実施しました。マーシャル諸島は1914年、第一次世界大戦において日本が占領、以後国際連盟委任統治領「南洋諸島」の一部として日本が統治を行い、第二次世界大戦後は国連の信託統治領として米国が統治、1986年米国との間で自由連合盟約（コンパクト）が発効し、独立したという歴史を有し、日本とも関係が深い国です。【聞き手：インターン生 金原弘基。2016年9月16日】

Q・日本とマーシャル諸島との関係についてお話しいただけますか。

マーシャル諸島共和国と日本の関係は、第二次世界大戦以前より、国際連盟委任統治領として続くもので、その関係は100年以上にもなります。マーシャル政府も、自国と日本政府や日本人々との間に特別な繋がりがあることを幸運に感じ、感謝しています。日本の統治に対する評価は様々に語られますが、マーシャル諸島の場合、私は否定的な要素よりも肯定的な要素の方が多かったように思います。マーシャルの人たちは、日本の統治の間に日本の特徴や伝統的な生活様式を学ぶことが出来たことを誇りに思っており、それらの伝統や生活様式は今日においてもマーシャルに受け継がれています。また、日本の統治下にあった当時、ビジネスマンや軍の関係者として訪れていた日本人男性とマーシャルの女性が結婚することもあり、彼らの子孫が今日の日系マーシャル人として活躍しています。

Q・マーシャル諸島共和国の環境問題に対する取り組みについてお聞かせください。

これはマーシャル諸島にとって非常に深刻な問題であると同時に、太平洋に浮かぶ他の島国にとっても深刻な問題になっていきます。2015年に行われた島サミットでも中心的な議題として取り上げられました。その際に安倍総理が表明した太平洋島嶼国への500億円を超える経済的な支援は、太平洋島嶼国にとって非常に有益なものとなると確信しています。私たちは日本やその他の大国が気候変動に対する基金について話し合いを持つ場により一層の透明性を求めますし、マーシャル諸島共和国もその話し合いの一部になるべきだと考えています。そして、私たちは私たちの国を気候変動から守るためにすべきことを明確にしていきたいです。

Q・マーシャル諸島共和国の観光政策についてお教えください。

ミクロネシア地域の中でも、アジアの国々に近いパラオのような国と違って、マーシャル諸島は海外からのアクセスが非常に悪く、観光地として不利な立場に置かれています。しかし、そのような不利な要素にも決して屈することなく、環境政策と併せてマーシャルの自然を売りに観光の促進を図っていきたくと考えています。島々に広がる美しい景観だけでなく、マーシャル周辺の自然豊かな海には第二次世界大戦時に運用された各国の戦艦が眠っており、多角的な視点から観光資源をアピールしていくことが重要でです。



【左から：金原（インターン生）・キチナー大使・ノート公使・小原（インターン生）】

マーシャル諸島共和国大使館



駐日マーシャル諸島共和国特命全権大使

トム・デイー・キチナー 閣下

また、国内の制度的な整備だけでなく、ビザ免除プログラムの申請などを通して各国に働きかけ、アクセスしづらいという地理的な弱みを軽減していくことが今後の課題であると考えています。

Q・日本とマーシャルの今後の関係の発展をどのように期待しますか。

将来にわたって日本とマーシャル諸島の良好な関係を維持していく際には、学生が貴重な存在となっ てきます。両国の学生が交流することを通して、より良い関係を構築することができるはずです。最近だと、マーシャル諸島から理系の高校生が日本を訪問するなど、マーシャルと日本の子どもたちが交流を行う基礎的なプログラムは、現時点である程度構築されていますが、こういった活動が深化し、拡大していくことが望ましいと考えています。

大学レベルでの交流について言うと、JICAの奨学金プログラム等、マーシャルを訪れる教育プログラムはありますが、実際にマーシャルを訪れる学生は1年間で1〜2名程度しかいません。また、日本で修士号を取る奨学金制度も存在していますが、マーシャル諸島からこの制度を利用してはいる学生も決して多くありません。こうした留学制度については、より長期間の滞在が可能になれば、貴重な経験を今以上に積むことができると思います。

私は駐日大使として、より多くのマーシャル人が日本を訪れ、より多くの日本人がマーシャルを訪れるよう働きかけていきたいと思っています。特に人の移動がよりスムーズになるよう、日本政府に対してマーシャル政府のビザ免除プログラムを受け入れてくれるよう働きかけていきたいと思っています。

8月

ミクロネシア離島へ 貯水タンク支援プロジェクト

APICがミクロネシア自然保護財団(MCT)と協力して支援を行っているミクロネシア連邦ポンペイ州サプワアフィク環礁の干ばつ復旧事業が、ミクロネシア連邦で発行されている新聞で紹介されました。

GGFがAPICと提携してサプワアフィク環礁における水の安全保障を支援(カセレリエ・プレス記事 APIC翻訳)

ミクロネシア自然保護財団は、エルニーニョによる被害とミクロネシア連邦ポンペイ州サプワアフィク環礁の干ばつ復旧事業を支援するため、日本の国際協力推進協会(APIC)(\$10000)と国際グリーングラント基金(GGF)(\$5000)から援助資金を受け取りました。

ミクロネシア自然保護財団とこれらの二つの機関がサプワアフィク環礁島を選んだ理由は、同島がミクロネシア離島でもっとも人口が多く、多くの支援を必要としているためです。(ミクロネシア連邦2010年国勢調査によるとサプワアフィク環礁の人口は456人)また、サプワアフィクのカピノ・ネイオール市長は、とても行動的なりリーダーで、離島の人々を支援するために様々な組織に対して積極的に援助を求めてきていますが、同市長の努力は上記の助成金の調達で報われたといえるでしょう。

このプロジェクトの目的は、水と食料の安全保障です。市役所は、雨水を溜めて、すべての島民が水を利用できるように、助成金で8つの貯水タンクを購入し、



「2016年8月の「カセレリエ・プレス」にて掲載された本プロジェクトの紙面(左半分)」

11月 麗澤大学 シンポジウム

11月3日に麗澤大学南柏キャンパスにて、創立者である廣池千九郎生誕150年記念事業として「太平洋がみんなのキャンパス」若者がつくる21世紀の共生社会」と題されたミクロネシアに関するシンポジウムが開催され、APICの佐藤昭治常務理事(元駐ミクロネシア連邦特命全権大使)がコメンテーターとして出席しました。

APICのサポートによりミクロネシア短期大学と教育連携協定を結んでいる麗澤大学は、2013年から毎年、学生が自主的に企画したゼミ活動として、ミクロネシア連邦ポンペイ島で、現地の学生とともに環境教育をテーマにしたプロジェクト活動を行ってきました。本シンポジウムはそのような学生の学習活動を発表し、ミクロネシアについての意見交換をする場として企画されました。

シンポジウムは2部構成で行われ、第一部では麗澤大学の学生がミクロネシア短期大学での活動報告を行った他、同様にAPICの支援を受けてミクロネシア短期大学へ学生派遣を行っている上智大学短期大学部の学生が、今年9月にミクロネシアを訪れた(本会報19ページをご覧ください)時の様子などを発表しました。また、APICの「麗澤大学・上智短大ミクロネシア学生受け入れ計画」(本会報21ページをご覧ください)にて麗澤大学を訪れていたミクロネシア短期大



「壇上で発表を行う、ミクロネシア短大のエトノル君(左)とラリツツ君(右)」

学の学生2名も登壇し、日本とミクロネシアとの関係などについて発表を行いました。
第二部では、APICの佐藤昭治常務理事の他に2名の有識者を招き、「世代間ディスカッション」と題して、麗澤大学のこれまでのプロジェクトを通じて得られた教育成果を紹介しつつ、日本とミクロネシア連邦を含む太平洋の「共生社会」について様々な意見交換がされました。



「ディスカッションにて、意見交換を行う浜田元JICAミクロネシア事務局長(左)とAPICの佐藤常務理事(右)」

シンポジウム全体を通して強調されていたのは、21世紀を「対立」ではなく、「共生」の時代にするために「つなぐ力」が必要である、ということでした。APICは「国際協力に資する人材育成のための支援及び助成」を事業のひとつの柱として掲げています。「つなぐ力」を備えた次世代の人材育成事業にも、今後力を入れていくことが重要と言えます。

サプワアフィク環礁島内に戦略的に設置することとされています。タンク一つの容量は1500ガロンで、合計12000ガロンの水を貯めることができます。市役所は、また、先のエルニーニョ干ばつにより深刻な影響を受けたサプワアフィク環礁のいくつかのタロ芋畑の修復・改善のために助成金を使います。
ネイオール市長の活動は、地域社会が自ら自分達の生活の質を向上させるために積極的に支援を求めれば、自分達の夢を叶える選択肢があるということを示しました。古いアメリカのことわざに、「きしむ車輪は油を差される」※というものがありますが、つまり自分の要求を主張しなければ誰も動いてくれない、という意味ですが、だから我々は、地域社会が自らの生活の質を向上させるためにはどのようなプロジェクトがよいのかということを念頭に置いて、支援を求めていくことが重要であると思います。
APICは日本と諸外国の相互理解を増進するとともに、いろいろな開発協力事業を通じて、国際協力の推進を図る活動を下記のとおり行っています。
1. 太平洋島嶼国地域における国際開発協力の支援事業
2. カリブ地域における国際開発協力の支援事業
3. APICカントリー情報早朝講演会
4. 国際協力懇話会(とくに地方との連携)
5. 国際協力に関心ある若い世代の育成
国際グリーングラント基金は、世界中の草の根の環境改善の努力に小さな助成金を作ることを目的とした慈善団体です。これらの助成金は、環境改善、持続可能性および保全の問題に取り組むアメリカと西ヨーロッパ以外の地域密着型のグループを支援するために使用されています。1993年のその設立以来、同基金は、129カ国、5000以上の案件を対象に、合計で2000万ドルの支援を行っています。

9月 ミクロネシア 異文化体験ツアー

上智大学及び上智大学短期大学部は、9月11日から18日にかけて、昨年 に続いて2回目となる「ミクロネシア 異文化体験ツアー」を実施し、大学か ら3名、短期大学部から5名、合計8 名の学生が参加しました。

本異文化体験ツアーは、2014年 に上智大学、上智大学短期大学部、ミ クロネシア短期大学の三者間で結ばれ た協力協定(MOU※)に定められた 学生交流の項目に基づき行われていま す。APICはMOU締結の段階か ら支援を行っており、今回のツアーに も理事1名及び職員1名を派遣し、こ の機会に今後のプログラムの設計を含 めてミクロネシア側と協議を行いまし た。

研修に参加した学生たちが訪れたの は、ミクロネシア連邦の首都パキールがあるポンペイ島です。彼らはミク ロネシア短期大学の学生寮に宿泊しな がら、ミクロネシアの歴史、文化人類 学、環境学など英語で行われる授業を 受講しました。その他にも、文化体験 の一環としてミクロネシア短期大学の

学生たちと一緒に学外へ出かけて、今 年の7月15日にユネスコ世界遺産に登 録されたナン・マドール遺跡見学、旧 日本軍の陣地や大砲が残されているソ ケース山の登山、駐ミクロネシア日本 大使館表敬訪問などを行いました。

また、今回の研修ツアーに同行した 上智大学短期大学部の山本浩学長の講 演会「日本の高等教育」がミクロネシ ア短期大学にて開催され、日本や日本 の教育制度に興味のある同大学の学生 たちが会場に詰めかけ、真剣な面持ち で聞き入っていました。

日本からミクロネシアに学生を派遣 する本ツアーは今年で2回目となりま す。今年の11月にはミクロネシア短 期大学から4人の学生を日本へ招待す る計画(本会報21ページをご覧ください) も始まりました。ミクロネシアか ら学生が日本に来た際には、本ツアー の参加学生が積極的に観光案内やホー ムステイの世話を申し出るなど、学生 同士のつながりは確実にできつつあり ます。ミクロネシアと日本の学生交流 がさらに活発化するよう、APICは 引き続き支援を続けて行きます。



【ナン・マドール遺跡にて、案内をしてくれた ミクロネシア短期大学の学生と共に】



【ミクロネシア短期大学のテイジー学長(左端) の話を聞く参加学生らと上智大学短期大学部の 山本学長(右から2番目)】

滞在中のスケジュール

日付	内容
9/11	移動日
9/12	オリエンテーション ナンマドール遺跡見学
9/13	授業体験 ネッチポイントにて海水浴体験
9/14	授業体験 ソケースマウンテン登山
9/15	小学校訪問 日本大使館表敬訪問
9/16	授業体験 山本学長による講演会 ホームステイ体験
9/17	休日

参加学生の声 上智大学 金田 耕一さん

プログラム内容について
島内観光では世界遺産に登録されたばかりのナン・マドール遺跡やケプロイの滝見学、ネッチ・ポイントでの海水浴、ソケース・マウンテンの登山と旧日本軍関連遺構の見学、さらに島で一番大きな市街地であるコロナア巡りをしました。

予想していたよりも小規模な観光業のお陰で遺跡も含めた自然環境が非常にきれいな形で広がっており、私がかれまで見てきた中で最も美しい自然の景色の数々を目の当たりにして、その美しさに言葉を失うほどでした。

市街地は、メインストリートに2階建て程度の建物が並ぶ程度、現地にとって高級である中古輸入の日本車が、信号の無い通りをゆっくりと流れる以外、大きな人通りも無い小規模なものでした。そうした自給的な生活が基本的な国の在り方であることは日本大使館で堀江大使からも詳しくお話を伺うことが出来ました。



【ポンペイ島の小学校にて、生徒と交流をする 金田君】

代の子らと変わらない様子で、英語も習得途中の可愛らしい姿を見ることが出来ました。

参加学生の声 上智短期大学 圓崎 由璃花さん

ホームステイ体験について
英語が苦手な私は一人でホームステイするのが不安でした。しかしもつとここで過ごしたい、と思えるくらい良い経験をしました。

夕方から次の日の朝までという短い時間だったのにも関わらず、カヤックをするために湖のようなところに連れて行ってもらったり、バナナやココナツのことを教えてくれたり、ポンペイのリンゴと言われるリンゴを食べさせてくれたり、様々な経験をさせてもらいました。

その中でも一番楽しかったのはカヤックに乗ったことです。波がなく本当に穏やかな湖みたいな場所で、人生初のカヤックに挑戦しました。小さいサメがいたり、たくさんのコウモリを見たり、マンングローブの間を通り抜けたり、ジャングルのような森に入ったり、本当に映画の世界にいるような経験ができました。人工の音が何一つ聞こえることがなく全て自然の音が聞こえて、通ったルートも全て自然にできたルートです。古い昔の世界にいる感じがしました。



【ホームステイ先のメイソン氏とカヤックを楽しむ圓崎さん】

カヤックが終わったあとは近所の方と一緒に夕食を食べました。地元のカニやカニのスープなど郷土料理を食べることができました。全て手作りの夕飯はどれも本当に美味しかったです。また学校の寮では水しかでなかったシャワーもホームステイ先ではお湯が出ました。1泊だけでなくもつとホームステイしたいなと思えるくらい楽しい時間を過ごせました。

10月31日から11月17日にかけて、APICの支援により、ミクロネシア短期大学（COM）から4名の学生が日本に短期留学しました。4名のうち男子学生2名は麗澤大学にて、女子学生2名は上智大学短期大学部にてそれぞれ講義を聴講するとともに、日本の学生との交流やホームステイ等を体験しました。

麗澤大学では、日本の大学生にとっての一大行事である大学祭に参加し、日本の若者文化に触れるとともに、同日に開催されたシンポジウム「太平洋がみんなのキャンパス」若者が作る21世紀の共生社会」にも参加し、日本の学生と交流をしました。上智大学短期大学部では、茶道等を行う和サークルの活動に参加した他、鎌倉や日光を訪れる等、日本文化に触れる機会を得ました。さらに合同研修として、上智大学で行われた環境問題に関するセミナーに4人一緒に参加し、同大学大学院生の講義を受けました。



【上智大学で行われたセミナーの後の記念写真。ザビエル留学生の2人（後列右端）も参加した。】

プシヨンパーティが行われ、在京ミクロネシア大使館モリ公使のご臨席のもと、小野麗澤大学副学長、山本上智短大校長、本プログラムをサポートした日本の学生・教職員らが参加し、親睦を深めました。

麗澤大学、上智大学及び上智短期大学部は、APICの支援により、それぞれがミクロネシア短期大学と

参加したミクロネシア短大学生の声

プログラムに参加したミクロネシア短期大学の4名の学生のうち、2名の感想を掲載しています。



Sasha Santiago さん（上智大学短期大学部で研修）

I'm a simple island girl who spent 19 years of my life in one place, a small island called Pohnpei. A year ago I never would have imagined that I would be visiting Japan. I was scrolling through my college newsfeed a few months ago when I saw the article on an application to visit Japan. I did not really think much about it but I decided to give it a try.

After turning in my essay I started wishing and hoping day after day that I would be picked and have the opportunity to have my first trip away from home.

I can still remember the day I got that email saying that I was selected. I was jumping around in joy and I was so ready to start packing my bags. We got here on November 1st and the first thing in my mind was to explore and see all that Japan has to offer. I was already expecting to see wonderful things here in Japan but what I did experience was way more than just wonderful. There are really no words strong enough to describe all that I have learned and experienced in this country. They are considered one of the most developed countries in the world for a lot of reasons that include the inventions of many advanced technology, the neatness and etc., but I am more impressed with the people. The punctuality, the hard work, and kindness of the people contributed a lot to the success of the country.

I learned a lot from this program and for that I will forever be grateful for the APIC program. I hope that this program continues, and that there will be future students who would have the opportunity to be able to see and learn about Japan the way I did.



P. J. Etnol 君（麗澤大学で研修）

I never imagined in my life that I will received this kind of opportunity to travel abroad especially visit Japan. When I receive an email about this trip, I told myself is this real? Why? Being picked to be an Ambassador of the College of Micronesia to Japan was really tough job for me why? This is the first time for me to travel to foreign countries so I am really lucky and fortunate and at the same time this trip marked the beginning of who I am in foreign countries.

I am really surprised and impressed by many things especially the people of Japan. When I was in Pohnpei I always heard from my families that staying abroad in the USA territory that some of them are having problem because of discrimination and racist people they encountered. Since last two weeks I am here I never encountered situation like that. The people of Japan are really kind and care for others even though I do not speak Japanese I understand them. So this impression I will take it home and spread the message to the people of Pohnpei from what I felt and experienced here. The omotenashi or hospitality I receive from the people of Japan and I will never forget. Another thing that I am impressed by the students of Japan is teamwork and the sense of humor that each and everybody share with each other. Every task that was given to each student they help each other to succeed. One thing I cannot forget in this trip the hospitality of our sponsor family. I would like to share also my deepest gratitude to Kinpara family for their omotenashi that they share with us. Thank You Very Much only God above can pay back everything.

滞在中のスケジュール

日付	麗澤大学	上智大学
10/31	成田着	成田着
11/1	オリエンテーション	大学周辺散策
11/2	大学祭準備	ディズニーシー
11/3	休日	シンポジウム
11/4	大学祭	授業
11/5	休日	休日
11/6	休日	休日
11/7	授業	授業
11/8	浅草散策	和サークル活動
11/9	授業	授業
11/10	授業	日本文化交流
11/11	環境セミナー	環境セミナー
11/12	ホームステイ	ホームステイ
11/13	ホームステイ	ホームステイ
11/14	授業	授業
11/15	ディズニーシー	和サークル活動
11/16	レセプション	レセプション
11/17	成田発	成田発

の「学生交流」を目的とした協力協定（MOU）を結び、すでに日本の学生をCOMに送る研修プログラムをスタートさせていますが、COMからの学生受け入れはまだ実施されていませんでした。この度、初めての試みとしてCOMからの学生受け入れを実施したことは、双方の本当の意味での「学生交流」に近づくという点で、非常に大きな意義があると言えます。

ミクロネシア短期大学（COM）とは
1972年にミクロネシア連邦に設置された2年制の大学。教養学科のほか海洋学科、ミクロネシア研究学科などの学科を有する。ミクロネシア連邦の各州から学生が集い、ミクロネシア連邦の発展を支える国内唯一の高等教育機関として存在感を示している。

【JICAを訪問した記者団 左からクインティナ氏（パプアニューギニア）、アマダブ氏（ジャマイカ）、ミネオ氏（トンガ）、シャリザ氏（トリニダード・トバゴ）、テヒタ氏（フィジー）】



気象庁、外務省（大洋州課及びカリブ室）、JICAを訪れた後、3日目の夜、記者団はAPIC主催のレセプションに出席しました。同レセプションでは、リカード・アリコック駐日ジャマイカ特命全権大使やガブリエル・ドウサバ駐日パプアニューギニア独立国特命全権大使のご臨席のもと、佐藤嘉恭APIC理事長、赤坂清隆FPCJ理事長及び高島肇久FPCJ評議員（一般社団法人東京倶楽部理事長）から挨拶が行われた他、中間報告として、各記者からこれまでの取材を通しての印象や今後の抱負などが語られました。



【前列左端：APIC 東海林／前列中央：APIC 佐藤理事長／前列右端：フォーリン・プレスセンター赤阪理事長／後列右端：APIC 荒木事務局長】

10月

太平洋・カリブ記者招聘

太平洋・カリブ島嶼国6名の記者が来日、東日本大震災跡などを取材

10月18日から26日にかけて、公益財団法人フォーリン・プレスセンター（FPCJ）の協力のもと、太平洋島嶼国及びカリブ地域から合計6名の記者を日本に招待しました。記者団は「環境」と「防災」を主なテーマに、我が国の先進的な取り組みについて各地で取材を行いました。

本プログラムは、昨年度「太平洋記者招待計画」として始まりましたが、参加記者や関係各方面から非常に高い評価をいただいております。今年度は太平洋島嶼国からの3名（フィジー、パプア・ニューギニア、トンガから各1名）に加えて、カリブ地域からも2名（ジャマイカ、トリニダード・トバゴから各1名）の記者を招待しました。取材行程の前半は、主に東京近郊での取材となりました。初日はフォーリン・プレスセンターからのオリエンテーションを

受けた後、神奈川県川崎市を訪れ、市内の家庭ごみ集積所、浮島処理センター資源化処理施設、川崎ゼロ・エミッション工業団地にて、我が国のごみ処理における取り組みを取材しました。記者の1人は川崎市が取り組むリサイクルについて、「自国は日本に学ぶところが多くある」と記事の中で述べていました。

2日目は、環境問題解決に貢献する本田技研工業株式会社のエネルギー技術、東京スカイツリーの雨水利用システムや防災技術を取材した後、上智大学大学院地球環境学研究所あん・まくどなど教授を訪ね、話を伺いました。まくどなど教授には、上智大学とAPICの間で締結された協力協定に基づいて、昨年度に引き続きご協力をいただきました。

滞在中のスケジュール

10/18		日本着
10/19	東京	ごみ集積場、浮島処理センター資源化処理施設、川崎ゼロ・エミッション工業団地 視察
10/20	東京	Honda、東京スカイツリー視察 あん・まくどなど 上智大学大学院教授と意見交換
10/21	東京	気象庁、外務省、JICA 視察 APIC 主催レセプション
10/22	東京	市民の環境保全活動 参加 浅草 視察 防災体験
10/23	石巻	被災地 視察 伊達懐石 取材 石巻市復興まちづくり情報交換館 中央館長と意見交換
10/24	仙台	災害備蓄倉庫、 スマート防災エコタウン被災地 視察、 東松島市復興政策課長と意見交換
10/24	東京	防災教育、災害報道 視察
10/26		訪日団 帰国

後半は本プロジェクトの二つ目のテーマである「防災」を軸に、東日本大震災の被災地を訪ね、3・11の様子やその後の復興支援、災害に対する備えについて取材をしました。4日目に東京消防庁の本所防災館にて防災訓練体験をした後、翌5日目の朝には記者団は新幹線で宮城県を訪れ、東日本大震災の被災地松島や石巻の視察を行いました。6日目及び7日目は、東松島市消防団の取り組みや小学校の防災教育について取材を行った他、仙台市に本部を置く新聞社、河北新報を訪れ、我が国における災害報道のあり方について取

材を行いました。

記者団には、ハワイを中心に活躍しているライター／フォトグラファターのフロイド・タケウチ氏がコーディネーターとして全日程に同行し、フロイド氏の指導のもと、記者団は精力的に取材・執筆活動を行いました。日本に滞在している期間に記者団が執筆した記事は合計で30本以上にも上り、中にはプログラム実施期間中に紙面やオンラインニュースに掲載されたものもありました。



【ジャマイカからの参加記者、アマダブ氏による東京スカイツリーに関する新聞記事】



【荒川クリーンエイド（ゴミ拾い活動）に参加した記者団】

エーオンジャパン 山本達也社長 インタビュー

現在、大学ではグローバル人材の育成が重視されています。上智大インターン生は8月24日、グローバル企業のエーオンジャパン株式会社（損害保険仲介を主に担当）の山本達也代表取締役社長とエーオンベンフィールドジャパン株式会社（再保険仲介を主に担当）の谷水克哉代表取締役社長にインタビューを行いました。エーオングループは1919年シカゴで事業を開始以来120カ国以上の国々でサービスを提供しており、グローバルに活躍することで、日本企業のグローバル化を牽引している企業でもあります。世界の第一線で活躍する企業と同じ歩幅で歩むエーオンの事業には、想像をはるかに超えるアイデアや実践が見受けられます。その中でも山本社長、谷水社長のお二人に、これからの日本に必要な「変化」や本当の意味でグローバルに活躍すること、さらには今若者に求めていることについて質問しました。【聞き手：インターン生 金原弘恭。2016年8月24日】

Q エーオンがグローバル化の最前線で意識していることは何ですか。

企業がグローバル化し、その事業の範囲や内容は多岐にわたります。しかし革新的な技術を生み出す企業は技術のプロであっても、リスクマネジメントのプロではありません。ですから私たちは、お客様のリスクサイドを共に考えるという仕事をしています。リスクが0%という仕事はありません。そこで私たちはその可能性を限りなく0に近づけるために、残りの1%ないしは0.1%を考えます。例えば、宇宙産業に携わる人はその技術に関して

は私たちより断然詳しいのですが、予測されるリスクに関しては私たちの専門分野であります。だからお互い協力しあうことで新しいことに挑戦し続けることができるのです。現代のグローバル社会というのは、それぞれのプロフェッショナルが自分のエリアを熟知しており、エリア外はみんな助け合う、そのような状態にあるのではないのでしょうか。皆がコミュニケーションを取れば、世の中はより良くなるのではないのでしょうか。

Q リスクという言葉には日本と欧米の間に意味の違いがあるのではないのでしょうか？

おっしゃる通りだと思います。例えば私が貯金した100万円を使って新しい仕事を始めます。すでにこの100万円を使うと決めた時点でリスクが発生します。もしかしたら作った商品が一つも売れないかもしれない。けれどもその仕事で成功した時には儲かる。

ここでリスクの捉え方に二種類あることがお分かりでしょうか。一つが「リスクを避けるもの」。これは日本風の考え方ですね。なるべく安全な道を通ろうとします。二つ目は「リスクをチャンス」。このように捉えるために、少しでもリスクの可能性を少なくします。リスクから目を背けず、「マネイジメント」することでリスクをチャンスへと昇華させることができるのです。これが欧米型だと思います。リスクマネジメントのためにアイデアを使うというのが欧米のリスクに対する考え方であり、事業を次々に拡大できる所以であると思います。



【インタビューに臨む山本社長と聞き手のインターン生】

Q グローバル化という、もはや避けられない現象に直面する日本企業に対して、これからエーオンはどのような方針でサポートしていくのでしょうか。

なかなかストレートな答えは出ないですね。5年、10年で日本の企業がグローバルに活躍できるかと言われたら、必ずしもそうではありません。「こらやればいいんだ」という方法は正直なところありません。

しかし、企業にとって今よりも新しく、効率的な方法がある時に日本独特の「恥の文化」をうまく回避して新しい路線に移り移っていくようなストー

Q 日本が国全体としてグローバル化を進めていく際に必要なことは何だと思われませんか。

日本の良さも絶対あると思います。こんなに快適で安全な国は日本しかないですね。仕事の質に関しても日本のアベレージは非常に高いと思います。レストランやスポーツショップで働く従業員の方々は皆、プロフェッショナル意識が高いですね。日本の「サービス」は海外から見ても非常に評価されています。しかし、このような「良い面」をたくさん持っているのにそれを外に伝える術が欠けている。つまり、「言葉の壁」です。日本で生まれ、育ち、就職し、日本文化の中でずっとやっていって日本では通じていても世界では通用しない人材になってしまいます。質の高い人材がたくさんいる中で、これは「人材の劣化」とも言えるのではないのでしょうか。我々外資系の人間であってもこの壁を感じています。だから、これから期待するのはみなさんのように若い世代です。若い世代の人たちが英語でも日本語でもしっかりとネイティブでできるようになり、日本の「良さ」を世界にアピールできるような人材になってくれれば、日本企業の変化もスピードアップしていくと思います。



【山本達也社長（右）と谷水克哉社長（左）】

◆インターンを終えて◆



上智大学総合人間科学部
3年生
金原弘恭

エーオンの御二方へのインタビューを通して、私は「リスクマネジメント」の大切さを学びました。リスクを避けるのではなく、徹底的にマネジメントすることで、リスクをチャンスに変えられるのだというお話が印象に残っております。これは私の生き方にも当てはめられると思います。社長お二方から教えて頂いたことを、残りの学校生活や実社会で実践していきたいと思っています。

またAPICのインターン全体を通して皆さんの学びや発見がありました。その一つが「仕事をすること」とです。APICの業務では、一人で仕事を抱え込むのではなく、他のインターン生や職員の方々と連携することが求められました。APICのオフィスでは情報共有が盛んにされており、職員の間には固い絆と厚い信頼を感じることが出来ました。そのような環境の中で私は、社会人としてのマナーや、真に「仕事をする」とを学ぶことが出来ました。

この三週間のインターンで私は自分の弱点に気づくと同時に、業務を重ねることで、様々なスキルを身に付けることができました。APICで学んだ事を糧に、これからさらに精進していきたいと思っています。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 千賀邦夫事務局長インタビュー

8月25日、上智大インターン生はセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）事務局長、千賀邦夫氏にインタビューを行いました。長らく国際機関で勤務されて、まさにグローバル世代の先駆者である千賀氏に、今日におけるNGOの実態や、今後どのような姿勢で国際協力事業に取り組むのかをうかがいました。【聞き手…インターン生 高橋晴子。2016年8月25日】



【略歴】
高校卒業後、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学で学士を取得し、ILO（国際労働機関）マニラ事務所にて勤務。1984年にアジア開発銀行に入行。南アジア局長などの要職を歴任し、約30年間の勤務を経て、現在はセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン事務局長として開発事業の一端を担う。なお、昨年度から上智大学国際協力人材育成センターのアドバイザーボードに就任。

Q SCJは現在どのように活動していますか。
SCJは、英国セーブ・ザ・チルドレン名譽総裁のアン王女が当時の美智子妃殿下にお声をかけ、同妃殿下のご友人、知人が協力・支援をなさって1986年に設立されました。現在は国際アライアンスという旗の下で、各国の政府、民間企業、市民団体など様々なステークホルダーと連携して、日本国内外で子どもへの支援事業を行っています。活動地域は80%がアジアに集中しており、主に教育、保健、医療、保護、緊急人道といった分野の支援を進めています。また、現在の事業はSDGs（持続可能な開発目標）の枠組みを基盤として、全ての子どもたちに開発の恩恵が行き渡るように、経済開発だけでなく環境や社会問題を網羅し、途上国、先進国すべての国を対象とした包括的な支援を行っています。

Q 日本のNGOの状況はどうなっていますか。

NGOは、欧米では政府や企業と対等なパートナーとして考えられているのですが、日本国内ではそのように認識されるまでに育っていません。一般的にはNGOはボランティアの集まりだから、それほど資金を使って大きな事業を進める必要はないのでは、などと一般的に考えられることが多く、メディアでもなかなか取り上げられないため、私たちは、市民レベルでの理解を深めることに苦勞をしています。

実は昨年10月に、私を含めNGOの代表3名、国会議員3名で渡米し、国務省やホワイトハウス、USAID（アメリカ合衆国国際開発庁）、NGOの方々対話する企画がありました。アメリカでは、NGOを戦略的かつ対等なパートナーとして認めているのです。その理由は、USAIDなどの政府機関が活動できる範囲や得られる情報と、民間団体であるNGOのそれがそれぞれ異なるため、互いに情報を提供し、協力しながらそれぞれの事業を補完しあって進めているところにあります。これに基づき、NGOが事業を行うための助成金において直接費だけでなく、間接費、団体の管理費を政府が提供することで、NGOが体力をつけていったのです。

一方、日本のNGOは外務省などからの助成金で賄われている場合は、間接費や管理費は対象となっておらず、事業を実施すればするほど、体力を消耗するという矛盾が生じています。またODAの分野でも、日本が出しているファンドの中で、NGOが実施した事業資金はたったの3%しかありません。こうした状況を踏まえ、日本でもNGOとの関係を見直す動きが見られており、SCJも行政との連携の強化を進めています。

Q 国際支援は、ともすれば支援される国の内政干渉に及ぶ危険性ははらんでいます。このような事態を回避するためにどのような手段を講じていますか。

セーブ・ザ・チルドレンは、世界120か国の各事務所が現地調査やヒアリングを行い、現地の人々のニーズを洗い出し、常に状況を把握することで支援の戦略を立ち上げています。また、支援計画のフレームワークを現地の人々と共有し、当事者の彼らがドライバーとして主導する仕組みを作ること、一方向的な働きかけを防いでいます。と、同時に彼らが主體的に動けるようにキャパシティビルディングの支援も行っています。

Q SCJが考えているSDGの取り組みは何ですか。

SDGsの項目は、貧困や格差問題、気候変動など、どれを取っても解決が長期間に及ぶものばかりです。こうした問題に最も強く影響を受けるのは子どもたちであるため、彼ら自身が自らを取り巻く課題に対して知見を深めていく必要があります。SCJは彼らが主體的に課題解決に向けて対応していく体力、知力、能力を養うため、包括的な支援活動を行っています。

Q SCJは民間企業とも連携を行っていますか、実際にどのような事業を行っていますか。

企業との連携の事例としては、株式会社リコーと提携したインドでの学習支援があります。プロジェクトの有効な利用ができるようSCJ側が教師に対して研修の機会を提供し、結果としてプロジェクトの売り上げとともに教育の質を高め、より付加価値のある取り組みを行っています。こうした企業側のCSR（企業の社会的責任）、その一部であるCSV（共通価値の創造）を考慮し、企業の本業に沿う形で社会貢献を行っています。

政府機関との連携事業の例では、ODAの一環として2006年にJICAを中心として新設された「ユニティ開発支援無償」において、SCJはまだ一度だけですが「コンサルタント」として人材育成などソフトインフラ分野での支援を行いました。また、世界銀行の日本社会開発基金のように、日本政府が資金を提供する形でNGOと協力するプログラム連携も充実してきています。

◆インターンを終えて◆



上智大学 法学部
2年生
高橋 晴子

「国際協力」「国際貢献」の本質とは何か。何をもち「グローバル化」というのだろうか。こうした疑問の解決がインターンの目標だったため、今回千賀氏にインタビューする機会が得られたことは幸運でした。千賀氏は、グローバルな人間そのものを正に体現しています。「外に出ると、通常お会いできないような方々とのネットワークが広がっていく」という言葉通り、私自身も大学の外に出てインターンという職業体験をしたことで、視野も人の輪も確実に広がりました。

最近よく耳にする「グローバル人材」という言葉を、千賀氏は「異文化社会を対等なものとして意識し理解できる能力を持ち、国際的課題の解決に向けて共に主體的に行動することが出来る人」と定義しました。主体性を持って貪欲に周囲の世界を知ろうとする姿勢が「グローバル人材」としての成長につながるのであれば、私がこうしてインターンを行なっていることも意義があるはずだと信じています。政府や企業、国際NGO、APICのような財団法人などの様々なアクターが各々役目を担い、より良い世界を築くために関わりを深めている事実を知ったことも、また、大きな収穫でした。



【インタビューに臨む千賀事務局長（右奥）とAPICインターン生】

第3期ザビエル留学生 ミコさんが上智大学に入学

9月21日に上智大学で秋学期入学式が行われ、ザビエル留学生として第3期生となるミコさんが出席しました。ミコ・ロンキリオさんは2016年の秋学期から4年間、上智大学の国際教養学部で勉学に励みます。

APICとの「教育に関する連携協定」に基づき、上智大学では既にザビエル留学生として、メアリー・ヘレン・モリさんとリサ・マリアナ・オウエさんの2名が大学生活を送っています。

3名の留学生は日本の生活に慣れ、11月に行われた麗澤大学と上智短大の受け入れプログラム（本会報21ページをご覧ください）では、全員が揃ってミクロネシア短期大学の学生と交流する姿が見られました。

APICでは各事業と連携して、ザビエル留学生への支援を引き続き実施していきます。



【ミコさん（中央）とそとご両親。上智大学の入学式会場前】

ザビエル高校

ザビエル高校は1952年、ミクロネシア連邦チュークウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で生徒数は約200名になります。北大西洋地域で、最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも、生徒が入学します。学生の学業水準はこの地域において最高であり、近年はアメリカで最も競争率の激しい奨学金の一つである「ビル・ゲイツ奨学金」受給者を多く出しています。過去の卒業生には、ミクロネシア連邦モリ前大統領やクリスチャン大統領などこの地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

聖徳高校がAPIC事務所を訪問

6月15日、聖徳学園中学・高等学校の授業外学習の一環として、7名の生徒がAPIC事務所を来訪しました。

APICの支援の下、ザビエル留学生として上智大学で学んでいるメアリーさんとリサさんの2名が、中高生の皆さんにミクロネシア連邦のおススメスポットやローカルな生活、それぞれの島に伝わる伝説などについて、英語でわかりやすく説明するなどをして、日本の高校生と文化交流を行いました。



【ミクロネシア連邦について説明を行うメアリーさんとリサさん】

聖徳の生徒たちは英語で聞いて話すことについて難しいと感じる部分もあったようですが、初めて出会ったミクロネシア人留学生の話に熱心に聞き入っている様子でした。メアリーさんたちの説明が終わると、聖徳高校の生徒から、英語で自分たちの学校について紹介が行われ、ザビエル留学生も日本の学校生活に興味津々でした。

最後に、留学生2名からはウクレレで歌のプレゼントがありました。



【ウクレレとともに、聖徳高校の生徒との記念写真】

ザビエル留学生2名が PICでインターン体験

ザビエル留学生が国際機関・太平洋諸島センター（PIC）でインターンシップを行いました。これは、外務省の太平洋諸島フォーラムにおいて、太平洋島嶼国の学生に対する日本でのビジネス活動のトレーニングを望む声が高まり、また、各国政府より寄せられている島嶼国の若者のビジネススキルアップ支援に対する要請があることを受けて実施されています。また、日本人学生のインターン生との交流などを通して、若者の人的交流の促進も行っています。

ザビエル留学生のメアリーさんとリサさんは、10月～12月の3か月間、週に1回、1日6時間程度のインターンシップを計10回行いました。インターンシップの内容としては、日本語による電話対応や来客対応、展示スペースの整理、関係先との打ち合わせの参加などの業務に加えて、日本のビジネス習慣や貿易・投資・観光の特徴など、日本のビジネスに関するレクチャーの受講もしました。また、実際に、企業や観光局など関係機関を訪問して、インタビューを行うなど実践的な活動を



【オリエンテーションの様子】

通して、多くの事を学びました。

インターンシップ中は原則として日本語を使用し、12月には、インターンシップの集大成として、日本語でミクロネシア観光をアピールするプレゼンテーションも行いました。

日本語での業務遂行は、2人にとって容易な挑戦ではなかったようですが、積極的に取り組みました。大学における学びだけでなく、今回のような社会的な経験をを通して、日本という国をもっと知ってもらい、日本への留学が将来につながるより充実したものになるために、APICは支援していきます。

皆様のご支援に感謝いたします

ザビエル留学プログラムは、皆様のご寄付により、2016年12月現在、上智大学留学生基金への寄付を併せて、総額約8000万円をお預かりしています。皆様のおかげで、留学生が上智大学で充実した生活を送っています。心から感謝いたします。

御礼申し上げますとともに、APICは、ザビエル留学生の支援を通して、引き続き国際協力の一役を担っていくことをお約束いたします。

ザビエル留学生奨学金ご寄附のお願い

対象 ザビエル高校卒業生 毎年1～2名
留学先 上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金 卒業までの4年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆さまからのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先

三菱東京UFJ銀行 本店（店番001）普通口座 1660339
口座名 一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口
カナ名 ザイ)コクサイ キョウリヨク スイシン キョウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

APIC 役員名簿

【役員】

- 理事長：佐藤 嘉恭（最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使）
 常務理事：佐藤 昭治（最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使（兼パラオ・マーシャル諸島））
 理事：荒木 恵 一般財団法人国際協力推進協会 事務局長（最終官職：財務省 国際局局付派遣職員（アジア開発銀行））
 理事：坂本 吉弘 一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長（最終官職：通商産業省 通商産業審議官）
 理事：炭谷 茂 社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長（最終官職：環境省 事務次官）
 理事：芳賀 達也 一般社団法人太平洋協会 事務局長
 理事：舟木 いさ子 ヤクモ株式会社 代表取締役会長
 監事：金成 憲道 ドイツ証券株式会社 取締役会長
 監事：兵藤 廣治 兵藤税理士事務所 税理士（最終官職：衆議院 大蔵委員会調査室 室長）

【評議員】

- 評議員：島内 憲 元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
 評議員：渋谷 健 コモンズ投信株式会社 取締役会長
 評議員：原田 明夫 公益財団法人国際民商事法センター 理事長・弁護士（最終官職：最高検察庁 検事総長）
 評議員：廣野 良吉 成蹊大学 名誉教授
 評議員：本多 義人 東神インターナショナル株式会社 名誉会長

APIC カントリー情報早朝講演会



2017年1月19日の第332回APICカントリー早朝講演会では、杉山晋輔外務事務次官による講演、「2017年の日本外交 課題と展望」（仮題）を予定しております。

※写真は2015年1月（第310回）に講演を行う杉山外務審議官（当時）

毎月1回開催されるAPICカントリー情報早朝講演会では、講師として招いた外務省幹部、在外大使などにより、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。

現職の外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、現在進行中の国際情勢をテーマとして質の高い話を聞くことができると、参加者から高い評価を得ています。なお、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細については、裏表紙に記載しているAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

最近の講師とテーマ

- 第331回 2016年12月15日 外務省中南米局 局長 高瀬寧氏
 「日本・キューバ関係を含む日本の中南米外交」
 第330回 2016年11月17日 外務省 北米局参事官 小野啓一氏
 「米国大統領選挙と日米関係」
 第329回 2016年10月20日 前国際連合日本政府代表部特命全権大使 吉川元偉氏
 「最近の日独関係、ドイツをめぐる諸問題、EUの展望」
 第328回 2016年9月15日 前在フランス共和国特命全権大使 鈴木庸一氏
 「フランスの内外情勢、日仏関係の展望」
 第327回 2016年7月28日 前在連合王国特命全権大使 林景一氏
 「英国をめぐる内外情勢、日英関係の展望」
 第326回 2016年6月16日 外務省 前外務審議官（経済） 長嶺安政氏
 「最近の日独関係、ドイツをめぐる諸問題、EUの展望」
 第325回 2016年5月19日 前在シンガポール共和国特命全権大使 竹内春久氏
 「シンガポールの発展と日本」
 第324回 2016年4月21日 前在イラン・イスラム共和国特命全権大使 羽田浩二氏
 「最近のイラン情勢」

※講演時の役職を記載しています。

ナン・マドール遺跡 ユネスコ世界遺産登録 APICが保存に協力



味を持っています。ナン・マドールは、西暦1000〜1600年ごろにポンペイ島を統治していたシャウテウル王朝の都として、政治・信仰の中心の特別な海上都市として栄えました。遺跡内には、王や神官の住居や墓地、集会場などがあつたことが確認されています。また、外洋からの入り口は一つで、遺跡内の島々を移動する際に、人々はカヌーを使用していたとされています。

島の大部分がマングローブに覆われているため、開発が進まず、神秘的な姿のまま残されています。貴重な遺跡であるので、連邦政府や州政府による保護が行われていますが、十分ではなく、今回、世界遺産と同時に危機遺産にも登録されました。今般、APICは、カンボジアのアンコールワット遺跡保存で著名な石澤良昭上智大学元学長やナン・マドール遺跡を長年研究してきた片岡修関西外国語大学教授などの協力を得て、同遺跡保存の支援を決定しました。

ミクロネシア連邦のポンペイ州にあるナン・マドール遺跡が、この度ユネスコ世界文化遺産に登録されました。ナン・マドール遺跡は、ポンペイ島南東部のテムエン島南東麓に位置し、大小約95の人工島で構成され、太平洋地域において最大の規模を誇る巨大遺跡です。

「ナンマドール」とは現地語で、「神々と人間との間に広がる空間」という意



【ザビエル高校生（理科実験教室にて）】

APIC は本年 5 月、ハワイ在住の写真家 Floyd K. Takeuchi 氏が撮影したミクロネシア写真シリーズの展示会を上智大学 2 号館ロビーにおいて実施します。同写真展を通じて我が国と歴史的に極めて関係の深いミクロネシア連邦を紹介し理解を深めるとともに、同国の観光促進を図りたいと考えます。また、この機会に「APIC 上智大学ザビエル留学制度」も紹介する予定です。



ミクロネシア写真展『南洋の光』

“Tropical Light” ~ Photographs by Floyd K. Takeuchi

日時：2017年5月12日（金）～6月9日（金）

会場：上智大学 四谷キャンパス 2号館ロビー 及び新6号館（ソフィア・タワー）

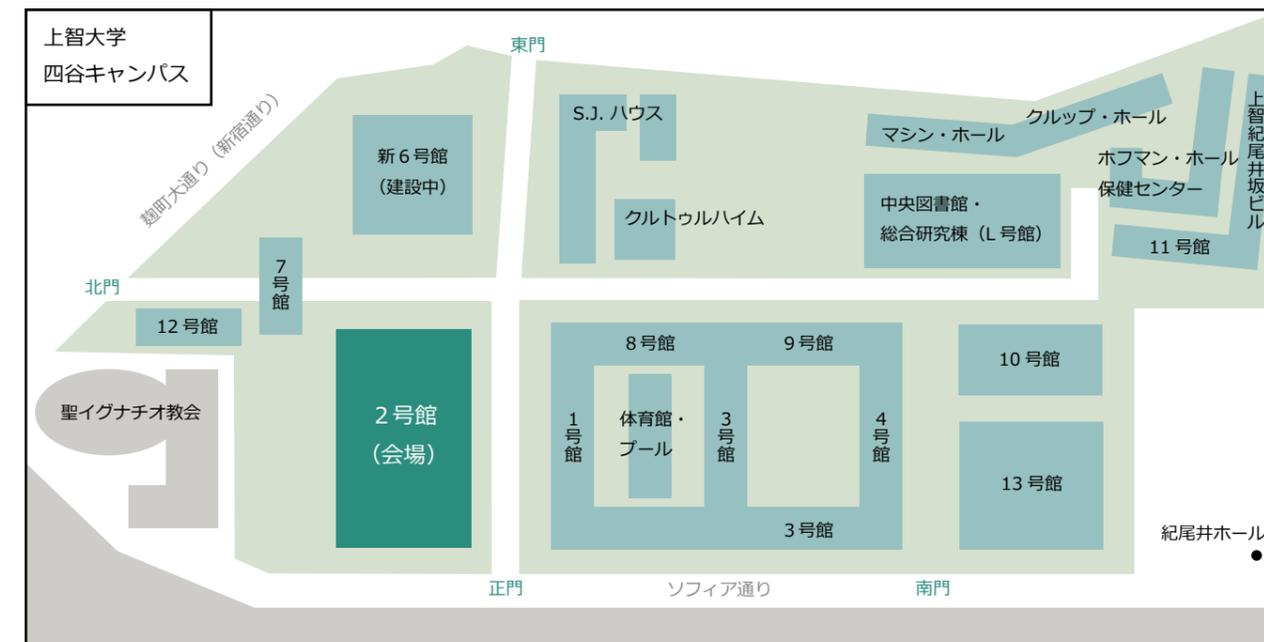
主催：一般財団法人 国際協力推進協会 共催：学校法人 上智学院、国際機関 太平洋諸島センター、一般社団法人 太平洋協会
後援：外務省（予定）、在京ミクロネシア大使館、公益財団法人 水交会、日本経済新聞社



Floyd K. Takeuchi 氏の略歴

ホノルルに拠点を置くフォトグラファー／ライター。日系アメリカ人3世としてマーシャル諸島マジュロ生まれ。新聞記者・編集者、ラジオニュースのディレクター、ラジオやテレビの特派員、雑誌編集者・発行者を経験。ホノルルを中心に多数の個展を開催。2014年には、ホノルル審査展示会で出品した「Paulami」が最優秀賞を受賞。その他、オセアニアに特化した「Waka Photo」のメンバーでこれまでに本及び電子図書を4冊出版。

上智大学アクセスマップ





APICでは維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省高官、大使による **APIC カントリー情報早朝講演会** を自動的にご案内するほか、参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所 ホテルオークラ東京 会議場

時間 午前8：30～10：00（朝食付き）

APIC 事務局 (TEL) 03-5577-2900 (FAX) 03-5577-2901
(E-mail) apicinfo@apic.or.jp

■発行人
佐藤嘉恭

■発行日
平成 29 年 1 月 1 日

■発行所
一般財団法人 国際協力推進協会
〒 101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-15-6
名鉄不動産竹橋ビル 7 階
TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901
MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集長
芳賀達也（理事）

■副編集長
小原和樹（早稲田大学大学院）

■編集
事務局 : 加藤奈美
APIC インターン生 : 松尾彩花（国際基督教大学）
青柳昌樹（麗澤大学）
小山貴大（早稲田大学）
大高彩果（津田塾大学）
兼子美帆（上智大学）
高橋晴子（上智大学）
金原弘恭（上智大学）